

《講演会報告》

千葉雅也氏講演会「部分的な無関心について」の報告

小 玉 重 夫

1 はじめに

2012年7月17日に、東京大学大学院教育学研究科基礎教育学コースの小玉重夫ゼミで、千葉雅也氏の講演会が行われた。

千葉氏は、フランス現代思想を専門とし、講演当時は日本学術振興会特別研究員、現在は立命館大学大学院先端総合学術研究科の准教授である。

講演会では、「部分的な無関心について：（有限）責任の哲学と分身の問題」と題して、講演が行われた。

以下では、講演の概要を簡単に報告する。なお、この講演の内容と密接に関わっている著作として、千葉氏の博士論文を改稿した『動きすぎてはいけない——ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』が河出書房新社から出版の予定である。また、雑誌『現代思想』（青土社）に2012年5月号から2013年7月号まで連載された「アウト・イン・ザ・ワイルズ」も、単行本化が予定されている。

2 他者への関心

千葉氏の関心の出発点は、他者への関心という点にある。氏は、駒場のポストモダン左派の文化的風土のなかで、「極めて知的に不良になるなり方みたいなもの」を教わってきたという。そして、そういうインパクトの中で強力だったのが、「他者」という概念であった。これまでの生活圏のフレームでは捉えられないような未知の他者性にいかにこたえるか、という問題意識を広く突き付けられたという。そこには、レヴィナス的な無限に遠い他者に対する無限に尽きない責任というパラダイムの影響があった。

しかしその後、ドゥルーズの研究に取り組む中で、レヴィナス的な無限責任という問題からずれるような他者論がドゥルーズの中にあるのではなかろうかということに気付いていったという。

それは、単一の究極の他者性に集約されていかないうような複数の他者性である。そうした複数の他者性という問題をどう考えるか、ここに、千葉氏のドゥルーズ研究の焦点が定まっていく。そして、ドゥルーズの中に、レヴィナス的な無限責任とは違う問題設定があることを突きとめようとする。

3 接続的ドゥルーズと切断的ドゥルーズ

ドゥルーズの中に、レヴィナス的な無限責任とは異なる問題設定を突きとめようとする際に、千葉氏が導入するのは、「接続的ドゥルーズ」と「切断的ドゥルーズ」を区別してみようという視点である。

前者の「接続的ドゥルーズ」は、ドゥルーズのベルクソン主義、ないしはコミュニケーションの存在論的な保証の面に着目したものである。

たとえば、「リゾーム」という概念。それは、よく知られているように、上下関係のツリーの構造ではなくて、横方向、多方向に、横断的につないで伸びていくものとしてイメージされる。それが、新しい接続可能性、他者とのコミュニケーションの可能性や、協力したり、新しい共同性を作ったりする可能性において語られたと、千葉氏は位置づける。

しかし、そうした横断的な接続への着目は、つながらねばならないという倫理的インプリケーションを伴う可能性がある。千葉氏によれば、ドゥルーズの存在論は、存在者は根本的にすべて相互に関係し合っていて、存在の次元において無関係なものは何事もないというテーゼを提出しており、これはベルクソン主義に由来するテーゼであるという。つまり、存在論の根本のレベルにおいては、コミュニケーションの可能性が常に既に保証されているという、コミュニケーション可能性の存在論的保証が、たとえばネグリとハートのマルチチュード論のように、左派にとってドゥルーズ哲学の一番の使いどころであったと千葉氏はみる。

これに対して、後者の「切斷的ドゥルーズ」として千葉氏が注目するのが、ドゥルーズのヒューム主義的な側面である。ドゥルーズには、ベルグソン主義とは異なるもう一つの哲学的なリソースがあり、それが、このヒュームに代表されるイギリス経験論である。ヒュームは、ある種の原子論、アトミズムの前提に立ち、接合や連続性というよりはむしろ離散的な世界像を展開しており、それがドゥルーズの哲学に重要な影響を与えていると、千葉氏は見る。

千葉氏によれば、ドゥルーズにこのようなアトミズム的な側面があるということは、特に日本においては、重視されてこなかったのではないかという。

こうしたドゥルーズのヒューム主義は、認識論的なアトミズムであると同時に、社会論的なアトミズムでもある。ここに千葉氏は、コミュニケーション可能性の存在論的保証を前提として一生懸命みんなで頑張りましょうという方向とは異なる、欲望が異なり、偏っているばらばらの個人が、連帯して共同体を成すと同時に、そこから切り離されてもいくという、いわば「アソシエーション」であると同時に「ディソシエーション」でもありうるような、そういう連合とその分解と再連合の哲学を読み込む。

このディソシエーションの問題を、千葉氏は単に政治哲学としての問題としてのみ捉えずに、それを認識論、そして存在論のレベルでも捉え直すことをめざす。たとえば、引きこもってもいい、降りてもいいということ、単に人間の自由、あるいは人間にとっての政治の問題としてのみ考えるのではなく、存在そのものの問題としても捉えることがめざされる。それは、千葉氏によれば、すべてが連続しているという世界観ではなく、すべては離散的であり、すべては結合したり分解されたりを繰り返すパズルのピースのようなものであるという、そういういわばレゴブロック的ともいえるべき世界観を根本的に採用することになるという。そういうビジョンをドゥルーズから引き出そうとするところに、千葉氏のドゥルーズ研究のきわめて重要なモチーフがある。

4 リゾームの「非意味的な切斷の原理」の方へ

以上のような、千葉氏のドゥルーズ研究のモチーフからは、リゾーム概念についても、横斷的に接続

可能なものというイメージとは異なる、別の見方が導き出される。

千葉氏によれば、リゾームは、二つの原理で考えなければならない。一方では、接合的に、ヒエラルキーなくつながっていくことができるが、他方では切斷的に、至るところに関係の切斷が入っているということである。これを千葉氏は「リゾームの有限化」と呼ぶ。たとえば、ある政治的なイシューへの絞り込みと、ほかのイシューに対する部分的な接続と部分的な無関係のバランスをどうネゴシエーションするかといった、そういう接続と切斷のバランスをとるという課題が、ここから導き出される。そういう意味で、部分的な関係と部分的な無関係という問題が、実践的にリゾームの有限性という問題から出てくることになる。

5 ドゥルーズにおける個性のアレゴリーとしての「無人島」

この部分的な関係と部分的な無関係という問題を、さらに千葉氏は、ドゥルーズの無人島論に引き寄せて展開する。千葉氏は、ドゥルーズの若いときの論稿「無人島の原因と理由」に依拠しつつ、複数の無人島というものを考えようとする。それは、ドゥルーズにおいて、複数の外部性、あるいは複数の他者性の問題であり、前述の部分的に無関係であり、部分的に関係している状況のことを指すアレゴリーであると考えられている。そこで、大陸／複数の無人島／大洋という、三つの形象が対比される。

大陸とは、既成の、あるいは再生産されてきた私たちのコミュニケーション空間である。これに対して、この大陸からアウトしてしまう、それが無人島である。

ただし、千葉氏によれば、ここで重要なのは、無人島という他者が、大陸に対して、鏡像的な関係を持つ外部性ではないということである。大陸と二項対立をなすのは海、大洋である。大洋とは、大陸にとっての単一の外部性であり、大陸の合理性に対して全くの非合理的な空間、あるいはカオスとして想定されるような場所である。これを千葉氏は、前述のレヴィナス的な、無限に遠い他者性、無限に遠い概念と重ね合わせてとらえるのである。

千葉氏によれば、重要なのは、大陸と大洋、この二つの間に無人島があるということである。この

間にあるのは、無限に遠いのではなく、有限の距離にあり、単一ではない、複数の外部性ということになる。コミュニケーションがうまく成功しているかのように偽装される空間が大陸であるとするならば、そこからの失敗可能性というのは、大陸の外にはじき飛ばされることである。そのはじき飛ばされるときに、大洋に完全に吸い込まれてしまうのが否定神学システムであり、それに対して、その手前のところに、ばらばらと複数落ちていくのが東浩紀の『存在論的、郵便的』がいう郵便的システムであるということになる、そう、千葉氏はとらえる。そして、この無限にまで行かないところにある無人島に展開する、自分に対して中途半端な距離に位置しているもろもろのずれた存在たちがすべて自分の分身として現れるととらえ、この「分身性」というテーマを千葉氏は、冒頭で挙げた『現代思想』誌の連載「アウト・イン・ザ・ワイルズ」で扱っている。

6 リアルとワイルズ、そして二元論へ

この連載「アウト・イン・ザ・ワイルズ」では、「リアルとワイルズ」というのが、二つの対立項となっている。千葉氏は、無限に遠い単一の外部性のことを「リアル」と呼び、それに対して、複数の外部性のことを「ワイルズ」と、複数形で呼ぶ。

前者のリアルは、ラカンが言うところの現実界に相当し、否定神学的な外部、レヴィナスの全き他者と、ほぼ同じ位置価値を持つものとしてとらえられている。

それに対して、千葉氏がワイルズとして捉えようとしているのは、ポスト構造主義の後期において問われ始めた、複数の外部性の問題であり、前述の複数の無人島や、あるいは東浩紀がいう郵便的なデリダの視点とまさに重なる。

講演の最後で、千葉氏は東浩紀の『一般意志2.0』に言及し、そこで集合知的なものと熟議とを、並立させ、拮抗させる二元論が提起されていることに注目する。千葉氏もまた、ドゥルーズの中につながつていく筋としてのベルクソン主義由来の論点と、ばらばらの社会の離合集散を考えるとというヒューム主義の筋の二重の作動を見ているという点において、この『一般意志2.0』と重なる視点のあることが確認される。つまり、接続的ドゥルーズと切斷的ドゥルーズは、どちらかに振り切れるわけではなく、重要なのは、この間の「と」である、この「アンド」というものをいったいどう考えた方がいいのかというのがこれからの問題になるという点が示唆されて、講演が閉じられた。

以上、千葉氏の講演を、細部を飛ばしながら、かなり強引に骨子のみを、しかしなるべく千葉氏の理路に忠実に即しながら要約してきたつもりである。

一読してもらえればわかるように、千葉氏の講演は教育哲学を研究する我々にとってもきわめて刺激的であった。たとえば、つながりの「絆」や無限の応答性が、ともすれば安易に語られる傾向のある教育の世界を一歩引いた地点から対象化しなおす上で、千葉氏のこの講演は、重要な視点を提供してくれるものであった。

冒頭で述べたように、千葉氏の博士論文をもとにした『動きすぎたはいけない——ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』と、『現代思想』に連載された「アウト・イン・ザ・ワイルズ」が、それぞれ刊行される予定である。そこには、今回の講演内容を含む氏の近年の研究成果が盛り込まれているので、ぜひ参照されたい。

(了)